

はなく、茎頂が水面に達した5月から7月にかけて見られたことは(水温がまだそれ程高くない時期)、原産地が北米北東部であるという事実と考え合わせて興味深い。

さて、在来の水生植物の多くは種子や殖芽('turion' と呼ばれる)、塊茎、塊根などの越冬器官を形成して冬に備えるが、コカナダモは特別な越冬器官を持たずに成体のままで冬を越す。この越冬中の葉茎は恐らく低温に耐えるために体内の浸透圧が高く、またデンプンを主とする貯蔵物質を多量に含んでいると予想されるが、これについての研究は今後の課題として残されている。

以上、雄蛇ヶ池で観察したコカナダモの生活環について簡単に述べてきたが、他の水体での生活環との比較がなされればこの植物の生活史がより明確になろう。

参考文献

エルトン, C. S. 1958. (川那部浩哉・大沢秀行・安部琢哉訳, 1971). 侵略の生態学. 思索社.
船越真樹・鈴木修平・沖野外輝夫. 1981. 木崎湖における水生植物の分布とその変動. 中部山岳フォッサマグナ地帯における生物相の生理、生態学的研究. 信州大学理学部生物学教室. pp. 69 - 90.

赤城山大沼のコカナダモ

斉藤吉永

コカナダモ *Elodea nuttallii* (Planch.) St. John (トチカガミ科) は北米原産の帰化植物で現在各地に広く野化しているが、低温にも耐え貧栄養湖でも生育する丈夫な水草なので今後も分布を急速に拡げていくだろうと思う。

会報(前号)で星一彰氏が尾瀬沼の福島側と思われる地点に進入したコカナダモの報告をされたが、尾瀬沼は海拔約1600余mの高所において自然環境も相当きびしいはずなのにコカナダモは生育している事実が驚く。

さて、尾瀬沼にくらべて高度こそ低いが群馬県の赤城山の沼(海拔約1330m)にもコカナダモが帰化していることを知った。それは去る1980・11・28に赤城に登った私は大沼畔の大洞の赤城神社付近から土産物店の多い沼の南東地区の水辺に打ち寄せられているのを採集した。船外機のスクリュウによって切断されて岸辺に流れついたものらしく時間に余裕があれば自生の場所の確認をしたかったが10余名の団体を連れ足尾町など他

星一彰. 1982. 尾瀬沼にコカナダモ侵入. 水草研究会会報 No.7: 1.

生嶋功. 1980. コカナダモ・オオカナダモ—割り込みと割り込まれ. 「日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学」(川合禎次・川那部浩哉・水野信彦編) pp. 56 - 62. 東海大学出版会.

生嶋功・蒲谷肇. 1965. 琵琶湖に野生化したコカナダモ. 植物研究雑誌 40: 57 - 64.

Kunii, H. 1982. The critical water temperature for the active growth of *Elodea nuttallii* (Planch.) St. John. Jap. J. Ecol. 32: 111 - 112.

追記

現在私はコカナダモの他に、エビモとヒシの生活環と成長を調べています。これらの植物について何か情報がありましたら下記宛御連絡下さい。話題の交換を希望しています。

〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1
東京都立大学理学部生物学教室
国井秀伸

の見学予定があったためやむを得ず下山した。沼畔の土産品の売店が旅館などの水槽から逃走したものが野化したものかも知れない。1968年刊の群馬県植物誌には記載されていないので繁殖は最近のことと思われる。

同じような条件にある榛名湖にも或いはすでに野化しているのではないだろうか。群馬県在住の会員諸氏のみならず同好の士の注意を望んで止まない。

(1982. 5. 3.)

○ 安原健允 マリモに関する文献目録 (日本大学文学部(三島)研究報告 第30集: 217 - 227, 1982)

マリモに関する文献が研究論文だけでなく、観光パンフレットや新聞記事なども含め、幅広く収録されている(国内141篇、国外87篇)。現時点ではもっとも充実した目録であって、マリモに興味をもたれる方には、たいへん参考になろう。